

そば安定生産技術対策セミナーでの主な質疑応答

①そばの作期移動による高温対策の研究と新品種「はるかみどり」等の紹介	
質問	回答
高温を避けるため、作期を遅らせる際に、栽培上、留意する点はあるか。	作期を遅くすることにより、積算気温が低くなるため、穂発芽しにくくなる一方、草勢が弱くなり倒伏しやすくなる恐れがあることから、農研機構では倒伏しにくい半わい性の品種開発を進めている。また、作期を遅らせすぎると、霜に当たったり、枯れ上がる前に収穫時期を迎える恐れがあることから、その点にも留意が必要。
「はるかみどり」の栽培適地として想定している北限はどこか。	試験栽培の結果から、関東北部を想定。はるかみどりの詳細は下記の研究成果を参考。 https://www.naro.go.jp/publicity_report/press/laboratory/karc/170362.html
発表資料「そばの高温対策に向けた研究紹介ー北日本での作期移動および革新的新品種開発よりー」に記述のある北海道の単収が極端に高い（例：2025年 極晩播 329kg/10a）のはなぜか。	資料にある単収は試験ほ場のデータであり、管理作業を徹底して行い、ほ場条件が良い環境下で栽培しているため、高くなっている。
品種改良はどのような方法（ゲノム編集や交配等）で行っているか。	ゲノム編集ではなく、交配により育種を行っている。
低アミロースそばはゲノム編集により開発されたものか。また、多収化に向けて注目しているゲノムがあればご教示願う。	低アミロースそばはゲノム編集ではなく、突然変異系統を選抜し、その系統に栽培しやすい農業特性をもった系統を交配して育成した。多収化の観点では、一般的にそばは結実率が2～3割と低いため、結実率が高い系統、また、結実しても倒伏しにくい系統に注目している。
発表資料「そばの作期移動による高温対策＜新品種「はるかみどり」の紹介＞」の16Pに「春まき栽培で収穫した種子を、直後の夏まき栽培に使用すると発芽率が低くなることもあるため、使用は避ける。」とあるが、どの程度発芽率が低くなるか。	春播きで収穫した種をすぐに夏播きに使用する場合、乾燥処理の程度にもよるが、1～2割程度発芽率が低下すると考えられる。

②産地事例紹介	
質問	回答
自社で堆肥を作っているのか。	近隣農家から調達した牛ふんにもみ殻やおがくずを混ぜて、堆肥を作っている。元々耕作放棄地だった農地を活用していることから、排水性が悪い粘土質のほ場が多いため、土壌分析を行い、ほ場ごとに堆肥の原料や、その配合割合を変えている。特に新しいほ場では窒素分が不足する可能性があるため、堆肥に米ぬかを混ぜることもある。冬に堆肥を散布し、春にブラウで天地返しを行い、当年度散布分は下層部分になるようにしている。
中耕除草はどのように行っているか。	中耕除草機を装着したトラクターにより実施。
農地は水田、畑地のどちらか。また、土壌の保水性についてはどのように考えていますか。	そばの作付ほ場は全て畑地。土壌の保水性については、堆肥を5年以上散布しているので、ある程度保水性は保たれていると認識。
近年、ヨトウムシ、タバコガ等による子実の食害が増加しているが、ヨトウムシ防除に使っている薬剤やタイミングはどのようにしているか。	比較的小さい被害が見られる場合はB T剤を散布し、被害が大きい場合はより強い殺虫剤に切り替えている。 ※B T剤とは、バチルス・チューリンゲンシスという細菌の産生物質を利用した殺虫剤。
耕作放棄地を活用する際に、苦労したことは何か。	粟のほ場だったところが多く、地上の草木に加え、地下の根も取り除く必要があったことから、平らな畑の状態に復元するのに2～3年かかった。
土壌分析はどのくらいのほ場数を実施しているか。	収量が低いところを中心に、毎年10件程度実施している。
そばの裏作として適している品目は何か。	背丈が高いなど、そばが発芽したときに他の品目であることがわかりやすい品目が良い。また、そばは8月に播種することから、冬に播種・移植して春頃には収穫が終わる生育期間が短い品目（そら豆やねぎ等）が適していると思われる。